

# 札幌市 スポーツ 推進計画

改定版 2013年度～2022年度

「スポーツの力でさっぽろの「未来」をつくる」

スポーツ元気都市さっぽろ





# 「スポーツ」とは

スポーツ基本法の前文では、「スポーツ」は次のように定義されています。

心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、  
自律心その他の精神の涵養<sup>かんよう</sup>等のために  
個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動

スポーツには、することによる楽しさや喜びだけではなく、心身の健全な発達、体力の保持増進、健康寿命<sup>※1</sup>の延伸など様々な効果があります。

そのため、札幌市スポーツ推進計画においても、スポーツとは、競技のようなルールに則り他者と競い合うものだけではなく、健康維持や仲間との交流など多様な目的で行われるものであり、健康づくりのための散歩やジョギングなどの軽い運動、また身体を動かすレクリエーション活動なども含むものとしています。



※1 【健康寿命】…健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のこと。平均寿命との差が短いほど、個人の生活の質が高く保たれているとされている



# 札幌市スポーツ推進計画(改定版)

## 目次

<b>第1章</b>	<b>スポーツ推進計画の策定</b>	1
1.	計画策定の背景	1
	(1)スポーツ振興法からスポーツ基本法へ50年ぶりの全部改正	1
	(2)スポーツ基本法に基づくスポーツ基本計画の策定	2
	(3)札幌市のまちづくりの基本施策	3
2.	計画策定の目的	4
3.	計画の位置づけ	4
4.	計画期間	4
<b>第2章</b>	<b>スポーツ推進計画の見直しに当たって</b>	5
1.	国の動向	5
2.	札幌市を取り巻くスポーツ環境の変化	6
	(1)冬季オリンピック・パラリンピックの招致表明	6
	(2)国際的スポーツイベントの開催決定	6
	(3)さっぽろグローバルスポーツコミッションの設立	7
	(4)スポーツ局の新設	7
3.	超高齢社会の到来	8
<b>第3章</b>	<b>スポーツを取り巻く現状と課題</b>	9
1.	これまでの達成状況と課題	9
	(1)成果指標の状況	9
	(2)3つの目標とこれまでの取組状況	19
2.	第2期スポーツ基本計画から取り入れる視点	28
	(1)第2期スポーツ基本計画	28
	(2)第2期スポーツ基本計画におけるキーワード	29
3.	札幌市の特色をいかして強化する視点	31
	(1)ウインタースポーツの振興	31
	(2)冬季オリンピック・パラリンピックの招致	31
4.	課題のまとめと今後の方向性	33
	(1)これまでの取組に対する課題のまとめ	33
	(2)今後の方向性	33

<b>第4章 基本理念と目標</b> .....	36
1. 基本理念 .....	36
2. 3つの目標 .....	37
3. 成果指標と目標数値 .....	39
<b>第5章 目標達成に向けた方針・施策</b> .....	40
1. 施策体系 .....	40
2. 各目標の方針・施策 .....	41
<b>第6章 計画推進のための取組</b> .....	69
1. 市民や関係団体との協働 .....	69
2. 将来を見据えた施設の在り方や配置の検討 .....	73
3. 計画の進行管理 .....	74
<b>第7章 資料編</b> .....	75
1. 計画策定までの経過 .....	75
2. 平成29年度指標達成度調査結果概要 .....	76
3. 平成29年度第2回市民意識調査結果概要 .....	79
4. 平成29年度第4回市民意識調査結果概要 .....	83
5. 札幌市スポーツ推進計画の中間見直しに係るアンケート調査 .....	87
6. 「これからの私たちとスポーツを考えるワークショップ」結果概要 .....	108
7. 札幌市スポーツ推進審議会 .....	118
8. 第27期札幌市スポーツ推進審議会名簿 .....	119
9. 用語解説 .....	120

札幌市では、市民のスポーツへの関わり方の広がりなどを背景に、平成15年(2003年)3月に「札幌市スポーツ振興計画」を策定し、「する・みる・支える」という3つの視点から、市民が様々な機会ですぐにスポーツに親しむことができるように、スポーツ施設の整備、イベントや競技大会の開催・誘致等を行ってきました。

その後、国が策定した「スポーツ基本計画」や、札幌市が策定した「まちづくり戦略ビジョン」の考え方などを踏まえ、平成26年(2014年)2月には、札幌市スポーツ振興計画を引き継ぐ計画として、「札幌市スポーツ推進計画(以下、「推進計画」という。)」を策定しています。

## 札幌市スポーツ推進計画

### 基本理念

## 「スポーツ元気都市さっぽろ

— スポーツを通じて、市民が、地域が、さっぽろが元気に —

### 3つの目標

- ①スポーツを通じて市民、誰もが元気に
- ②スポーツを通じて地域が元気に
- ③スポーツを通じて『さっぽろ』が元気に

## 1 計画策定の背景

### (1) スポーツ振興法からスポーツ基本法へ50年ぶりの全部改正

我が国において、国民の心身の健全な発達と明るく豊かな国民生活の形成に寄与することを目的に「スポーツ振興法」が制定されたのは、昭和36年(1961年)です。

この間、スポーツは広く国民に浸透するとともに、スポーツを行う目的は次第に多様化していき、地域におけるスポーツクラブの成長や、競技技術の向上、プロスポーツの発展、スポーツによる国際貢献や交流の活性化など、スポーツを巡る状況は大きく変化しています。

このような変化を受け、平成23年(2011年)6月に「スポーツ振興法」が全部改正され、「スポーツ基本法」が成立しました。スポーツ基本法では、スポーツは世界共通の人類の文化であり、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことが人々の権利であることが示されています。

## スポーツ基本法の8つの基本理念

- ①スポーツを享受することの権利
- ②青少年の健全育成とスポーツの推進
- ③地域のスポーツの場と交流の推進
- ④健康保持と安全確保
- ⑤障害者スポーツの推進
- ⑥競技力の向上
- ⑦国際交流の推進
- ⑧公平・公正性の確保

## (2) スポーツ基本法に基づくスポーツ基本計画の策定

さらに、平成24年(2012年)3月には、国においてスポーツ基本法第9条に基づく「スポーツ基本計画」が策定されました。

スポーツ基本計画は、平成24年度(2012年度)から10年間程度を見通した5年間の計画期間としており、スポーツ推進の基本方針として、「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること」を基本的な政策課題とし、次の7つの課題ごとに基本方針を設定しています。

## スポーツ基本計画の7つの基本方針

- ①子どものスポーツ機会の充実
- ②ライフステージ<sup>※2</sup>に応じたスポーツ活動の推進
- ③住民が主体的に参画する地域のスポーツ環境の整備
- ④国際競技力の向上に向けた人材の養成やスポーツ環境の整備
- ⑤国際競技大会の招致・開催等を通じた国際貢献・交流の推進
- ⑥スポーツ界の透明性、公平・公正性の向上
- ⑦トップスポーツと地域スポーツの連携による好循環の創出

その後、国では平成29年度(2017年度)から2021年度までの5年間における、スポーツ立国の実現を目指すための新たな指針として、平成29年(2017年)3月に第2期スポーツ基本計画を策定したところです。

※第2期スポーツ基本計画の内容については、P28をご覧ください。

※2 【ライフステージ】…人間の一生において節目となる出来事(出生、入学、卒業、就職、結婚、出産、子育て、退職など)によって区分される生活環境の段階

### (3) 札幌市のまちづくりの基本施策

札幌市では、平成19年(2007年)に「札幌市自治基本条例」を制定しました。

この条例では、「すべての市民が自らの権利と責務を重く受け止め、多様な人の縁と地域の絆を大切に力を寄せ合い、まちづくりのために自ら主体となって選択し行動することにより、大都市でありながら一人一人の思いや声が調和の中で生かされる、市民自治を実感できるまち札幌」の実現を目指して、「市民が主体のまちづくり」を基本理念とし、「市民参加と情報共有」により「身近な地域におけるまちづくりを推進すること」を基本原則とした市民自治によるまちづくりを進めることを定めています。

また、少子高齢化や人口減少、経済の長期にわたる低迷、エネルギー政策の見直しなど、札幌を取り巻く社会経済情勢が大きく変化するなか、これまでの「札幌市基本構想」及び「第4次札幌市長期総合計画」に代わる、新たなまちづくりの基本的な指針として、平成25年(2013年)2月に「札幌市まちづくり戦略ビジョン〈ビジョン編〉」を策定し、今後、札幌市が目指すべきまちの姿と、まちづくりの方向性を示しました。

ビジョン編では、目指すべき都市像として、「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」、「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」を描き、その実現のために、7つの分野のもとに24の基本目標を掲げ、市民、企業、行政等が一体となって推進していくことを目指しています。

平成25年(2013年)10月には、ビジョン編に掲げる都市像を実現するために、具体的に取り組んでいく都市経営戦略として、「札幌市まちづくり戦略ビジョン〈戦略編〉」を策定しました。

#### 札幌市まちづくり戦略ビジョンの7つの分野と重要な視点

地 域：地域での支え合いとつながりづくり  
 経 済：暮らしと雇用を支える経済の発展  
 子ども・若者：将来を担う子ども・若者の健やかな育み  
 安全・安心：安心して暮らせる「人に優しい」まちづくり  
 環 境：次世代へつなげる持続可能なまちづくり  
 文 化：文化芸術・スポーツによる創造性の育み  
 都 市 空 間：魅力と活力を持続的に高める集約型のまちづくり

##### 〈文化〉の分野の3つの基本目標

- 創造的な活動により、活力あふれるまちにします
- 文化芸術やスポーツの魅力によりにぎわいが生まれるまちにします
- 市民一人一人が魅力を再認識し発信するまちにします



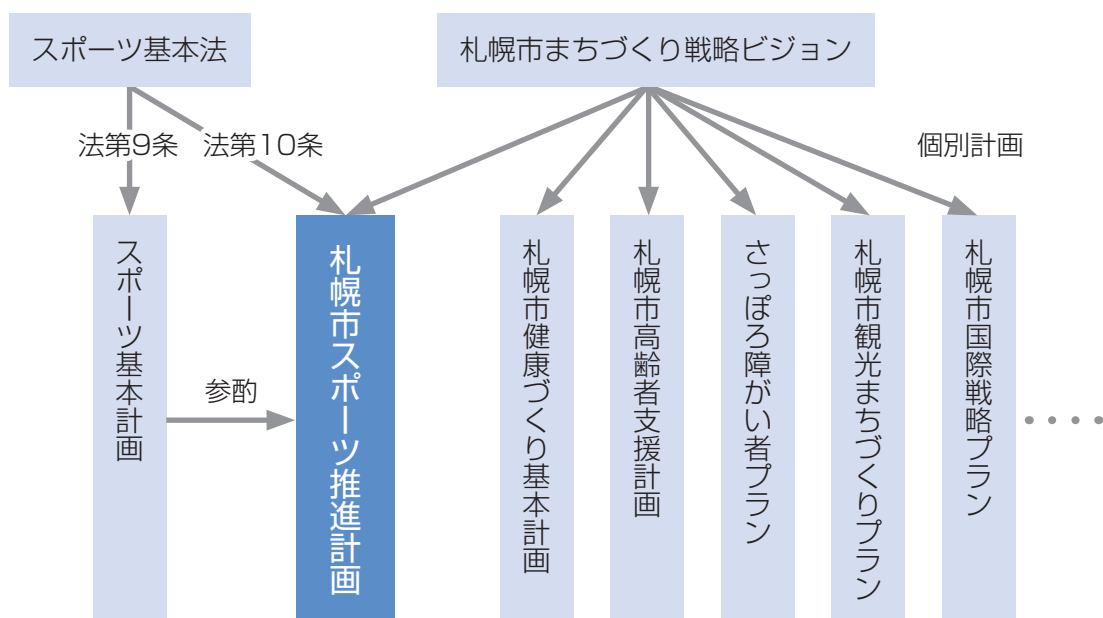
## 2 計画策定の目的

推進計画は、市民が、年齢や性別、障がいの有無等を問わず、それぞれの関心、適性等に応じてスポーツに参画する環境を整備し、スポーツの力をもって、青少年の健全育成、生涯を通じた健康の維持、地域コミュニティの再生、そして札幌市の活力の創造に寄与することを目的として策定しました。

## 3 計画の位置づけ

推進計画は、スポーツ基本法第10条に基づく地方スポーツ推進計画として策定するもので、「札幌市まちづくり戦略ビジョン」の個別計画として位置づけられるものです。

図表1 札幌市スポーツ推進計画の位置づけ



## 4 計画期間

推進計画の計画期間は、平成25年度(2013年度)から2022年度までの10年間としています。

国においては、スポーツ庁が発足し、これまで複数の省庁で行っていたスポーツ関連業務や権限を一元化したほか、「第2期スポーツ基本計画」が公表されました。

札幌市においても、冬季オリンピック・パラリンピックの招致を表明するとともに、ラグビーワールドカップ2019™や東京2020オリンピック競技大会の開催地の一つに選ばれたほか、スポーツを通じたまちづくりを総合的に推進するため、スポーツ局を新設するなど、スポーツを取り巻く環境も大きく変化してきました。

札幌市では、こうした環境の変化を捉え、これまでの計画の進捗状況なども踏まえながら、このたび、更なるスポーツ振興を目指して、推進計画の見直しを行うことにしました。

## 1 国の動向

推進計画の策定後、国においては、平成27年(2015年)10月、スポーツ庁が発足しました。スポーツ庁は、これまで文部科学省や厚生労働省など複数の省庁で行っていたスポーツ関連業務や権限を一元化し、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営むことができる、スポーツ立国の実現を最大の使命としています。

また、平成29年(2017年)3月には、平成29年度(2017年度)から2021年度までの5年間を計画期間とする第2期スポーツ基本計画が公表されました。この計画では、スポーツ参画人口を拡大し、すべての人々がスポーツの力で輝き、活力ある社会と絆の強い世界を創るという「一億総スポーツ社会」の実現に取り組むことが基本方針とされています。第2期計画においては、第1期計画で7つあった基本方針(P2参照)が、計画の目指す方向性を国民にとって分かりやすく簡潔な形として4つに整理されたほか、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催も関連付けた内容となっています。

さらに地方公共団体には、第2期計画を参酌してできる限り速やかに地方スポーツ推進計画を改定・策定し、地域の特性や現場のニーズに応じたスポーツ施策を主体的に実施するとともに、スポーツを通じた健康増進、共生社会<sup>※3</sup>の実現や経済・地域の活性化など、スポーツを通じた活力ある社会づくりに取り組むことが求められています。

そのため、札幌市においても、この第2期スポーツ基本計画における考え方を踏まえながら、推進計画の見直しを行う必要があります。

※第2期スポーツ基本計画から取り入れる主な内容については、P29をご覧ください。

※3 【共生社会】…誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である

※4 【都市基盤】…鉄道・道路・上下水道・公園・緑地・学校や区役所等の建築物など、都市を構成する基盤となる構造物

※5 【バリアフリー】…高齢者や障がいのある方などが、社会生活をしていく上で障壁となるものを除去すること。道路、建物、交通手段など物理的なものだけでなく、社会的、制度的、心理的なものを含めた全ての障がい無くすること

## 2 札幌市を取り巻くスポーツ環境の変化

### (1) 冬季オリンピック・パラリンピックの招致表明

札幌市は、昭和47年(1972年)に冬季オリンピックを開催したことをきっかけに、“まち”が大きな変貌を遂げ、都市機能が飛躍的に向上しました。またオリンピックに合わせて整備された各競技施設や、蓄積された開催運営のノウハウをいかし、近年では、2007年ノルディックスキー世界選手権札幌大会や2017冬季アジア札幌大会といった多くのトップレベルの選手が参加する大規模な国際大会を開催してきました。

冬季オリンピックの開催から40年以上が経過し、平成26年(2014年)11月、札幌市は再びオリンピックを開催するとともに、初のパラリンピックを開催しようと大会の招致を表明しました。

オリンピック・パラリンピックは、子どもたちに夢と希望を与え、ウインタースポーツの更なる振興を促すとともに、国際交流の促進や経済面での効果なども生み出すビッグイベントです。また、都市基盤<sup>\*4</sup>やスポーツ施設の整備や更新、バリアフリー<sup>\*5</sup>の促進といった、都市のリニューアルを推進する原動力にもなってくるものです。

オリンピック・パラリンピックの開催を、札幌がウインタースポーツを牽引する国際都市として、大きく飛躍するための絶好の機会と捉えて、スポーツ推進計画においても招致機運の醸成に向けた取組を進めていく必要があります。

### 札幌オリンピック・パラリンピック冬季大会 基本理念

#### 札幌らしい持続可能なオリンピック・パラリンピックモデルの提案 ～人と地球と未来にやさしい大会で新たなレガシー<sup>\*6</sup>を～

(開催提案書)

### (2) 国際的スポーツイベントの開催決定

札幌市は平成27年(2015年)3月、ラグビーワールドカップ2019<sup>TM</sup>の日本大会の開催都市のひとつに選ばれました。また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の際にも、サッカー競技の実施が予定されています。

このように、相次いで世界的なスポーツイベントが札幌で開催されることで、市民は世界トップレベルのスポーツを間近で観戦する機会が多く得られることとなります。これにより、市民のスポーツへの関心が更に高まっていくことが期待されます。

また、これら大規模イベントの開催を契機として、観光客誘致に結び付ける取組を強化するとともに、札幌の魅力を国内外に発信することでシティプロモート<sup>\*7</sup>の促進を図っていくことも、スポーツによるまちづくり、地域活性化の観点から必要です。

<sup>\*6</sup> 【レガシー】…オリンピック・パラリンピック開催を契機として社会に生み出される持続的な効果

<sup>\*7</sup> 【シティプロモート】…まちの魅力を再発見し、創造することで新しい都市の輝きをつくり出すとともに、市民が誇りをもってその魅力を内外に発信することで、世界の人々と多様な関係をつくり出すための一連の活動

### (3) さっぽろグローバルスポーツコミッションの設立

札幌市は、平成28年(2016年)3月、国際的なスポーツイベントやオリンピック・パラリンピック事前合宿の誘致等を戦略的に行う専門組織として、「さっぽろグローバルスポーツコミッション」を北海道や経済団体などとともに設立しました。

#### さっぽろグローバルスポーツコミッション 活動内容

##### ①北海道・札幌ブランドの向上

- ウィンタースポーツを主とした国際大会、オリンピック・パラリンピック等の事前合宿誘致

##### ②スポーツツーリズム<sup>※8</sup>の推進

##### ③おもてなし体制の充実

- スポーツイベントでの経済効果の創出
- スポーツボランティア<sup>※9</sup>の活動促進

札幌市の観光は繁忙期と閑散期<sup>※10</sup>の差が大きいことが特徴であり、閑散期の集客対策が課題とされています。札幌市の自然や雪をいかしたウィンタースポーツはその差を埋めることができる札幌の魅力のひとつといえます。

ウィンタースポーツをはじめとするスポーツツーリズム<sup>※8</sup>の取組を強化していく上で、さっぽろグローバルスポーツコミッションは、その中心的な役割を担っていくことになります。

今後は札幌オリンピック・パラリンピック冬季大会の招致も見据えながら、札幌市のみならず、北海道の豊富なスポーツ資源をいかして、北海道の魅力を発信するとともに、市民や団体の多様な交流を支え、地域活性化と交流人口<sup>※11</sup>の拡大を目指し、積極的な活動を推進していく必要があります。

### (4) スポーツ局の新設

平成28年(2016年)4月、札幌市は新たにスポーツ局を設置しました。

これにより、冬季オリンピック・パラリンピックや国際スポーツ大会を招致するための体制を強化するとともに、障がい者スポーツなどスポーツを通じたまちづくりを総合的に推進していくこととなります。

※8 【スポーツツーリズム】…スポーツを「観る」「する」ための旅行そのものや周辺地域観光に加え、スポーツを「支える」人々との交流、あるいは生涯スポーツの観点からビジネスなどの多目的での旅行者に対し、旅行先の地域でも主体的にスポーツに親しむことのできる環境の整備、そしてMICE推進の要となる国際競技大会の招致・開催、合宿の招致も包含した、複合的でこれまでにない「豊かな旅行スタイルの創造」を目指すものである

※9 【スポーツボランティア】…スポーツイベントや大会の運営のほかにも、スポーツサークルやクラブチームの運営、指導者や審判、地域のスポーツ活動等のボランティアとして携わること指す

※10 【繁忙期と閑散期】…札幌市においては、月別の観光客入込数が多い7月～9月(繁忙期)と少ない11月～4月(閑散期)を示している

※11 【交流人口】…観光者などの一時的・短期滞在からなる人口。定住人口(その地域に住んでいる人口、居住人口)に対する概念

### 3 超高齢社会<sup>\*12</sup>の到来

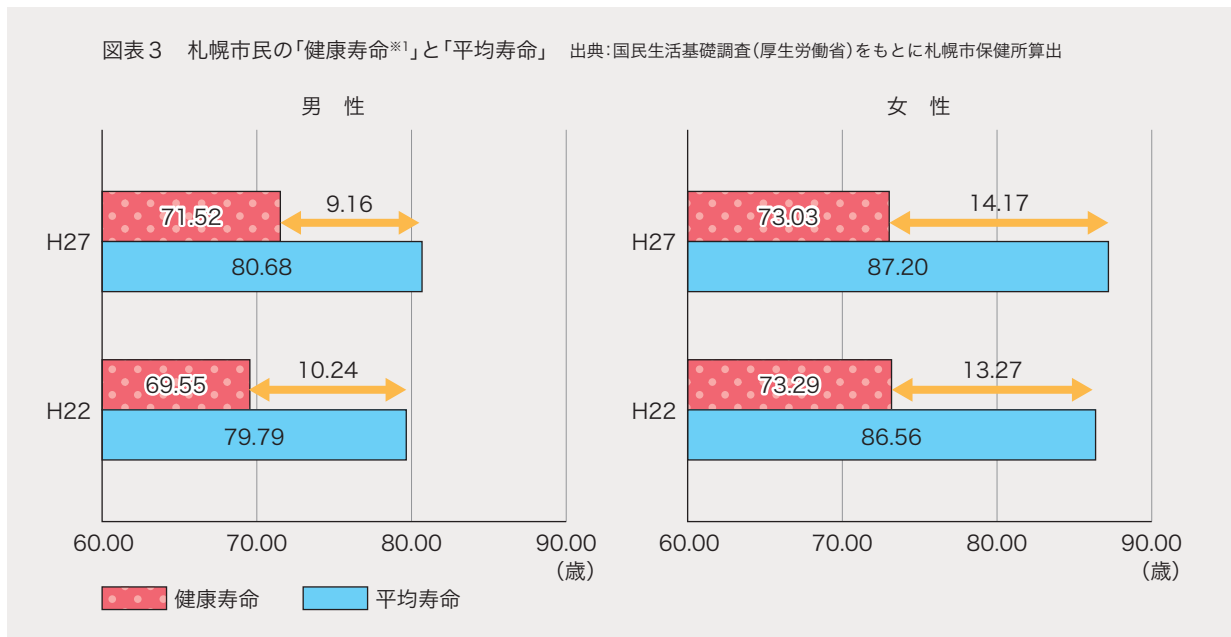
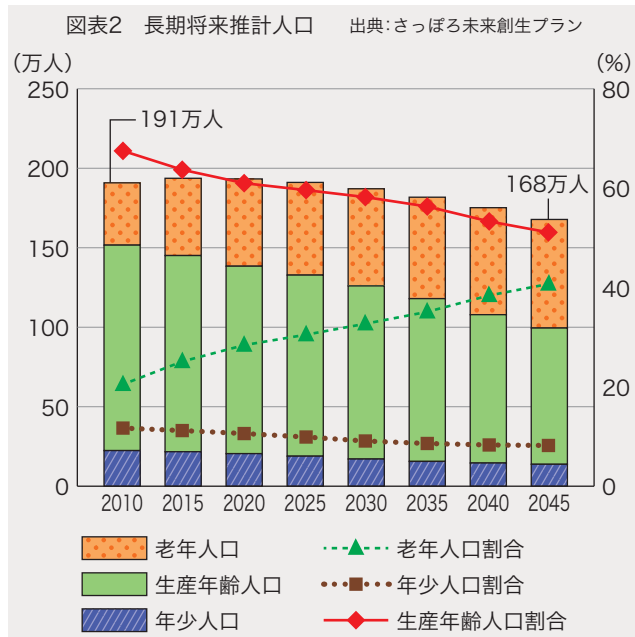
増え続けてきた我が国の人口は、平成20年(2008年)の1億2808万人をピークに減り始めています。

札幌市においても、今後、人口が減少していくことが予想されており、2045年には168万人になると推計されています。また、人口構造も変化し、年少人口(15歳未満)と生産年齢人口(15歳以上65歳未満)が減少する一方、高齢者人口(65歳以上)は増加しており、この傾向は将来にわたり続くことが見込まれています(図表2)。

平成27年(2015年)における札幌市の男性の平均寿命は80.68歳、女性の平均寿命は87.20歳まで延びています(図表3)。

市民が健康で生きがいに満ちた生活を送るためには、平均寿命だけではなく、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間である「健康寿命<sup>\*1</sup>」を延ばしていくことが重要です。健康寿命を延ばし、平均寿命との差をできるだけ短くしていくためには、スポーツが果たす役割は大きくなっていくといえます。

こうしたことから、今後もそれぞれのライフステージ<sup>\*2</sup>に応じて、スポーツに親しめる機会を充実させていく必要があります。



※1 【健康寿命】…健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のこと。平均寿命との差が短いほど、個人の生活の質が高く保たれているとされている  
 ※2 【ライフステージ】…人間の一生において節目となる出来事(出生、入学、卒業、就職、結婚、出産、子育て、退職など)によって区分される生活環境の段階  
 ※12 【超高齢社会】…総人口に占める65歳以上の人口割合が21%を超える社会のこと。なお、7%以上14%未満を「高齢化社会」14%以上21%未満を「高齢社会」と呼ぶ



## 1 これまでの達成状況と課題

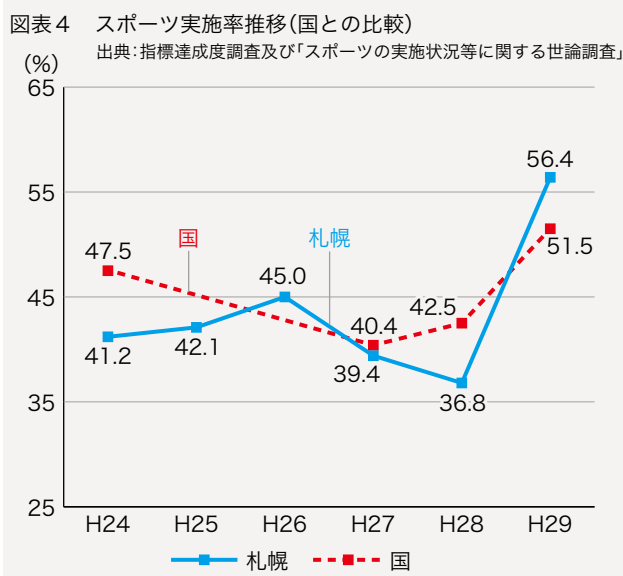
## (1) 成果指標の状況

推進計画では、基本理念である「スポーツ元気都市さっぽろ」を実現するため、4つの成果指標を設定しています。

ここでは、推進計画の見直しにおいて、それぞれの成果指標の達成状況と今後の課題について見ていきます。

## ① スポーツ実施率〔平成25年度:42.1%→平成29年度:56.4%〕

- 推進計画では、スポーツ実施率(週1日以上の運動やスポーツを行う成人の割合)の目標値を、国と同様、65%に設定しています。
- 国では、本格的なスポーツをする人のみならず、日々の暮らしの中で気軽に体を動かす人も含めて、スポーツ参画人口の拡大、スポーツ実施率の向上のための取組を進めており、平成29年(2017年)にはプロジェクトを立ち上げ、「スニーカー通勤」など歩きやすい服装での通勤を推奨するキャンペーンなども展開しています。

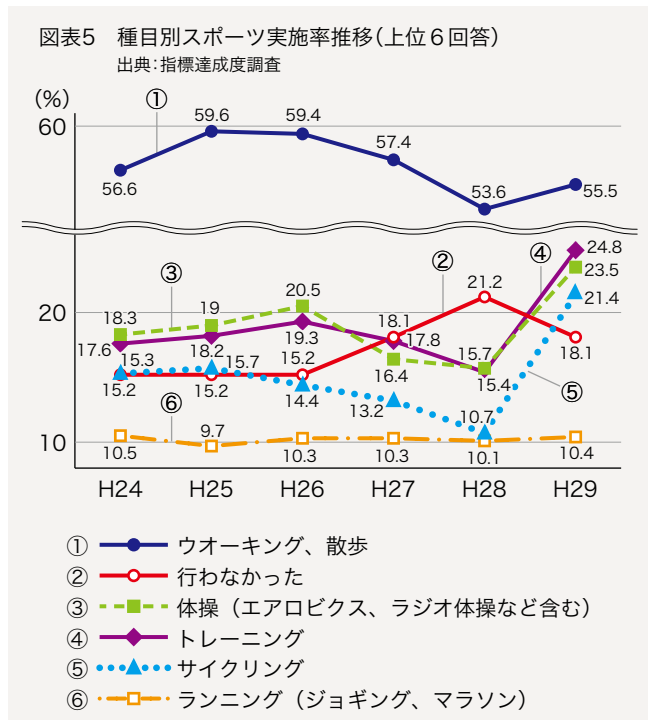


- 札幌市におけるスポーツ実施率は、平成26年度(2014年度)の45.0%をピークに減少傾向でしたが、平成29年度には、調査開始以来最高となる56.4%まで上昇しました。これは、近年、身近な健康づくりを促進する取組を展開してきたことや、調査を国に合わせて、市民の健康づくり活動をよりの確に捉えられる内容に見直したことで実態に則した活動状況が反映されたものと考えられます。
- しかしながら、スポーツ実施率は、いまだ目標値には達していないことから、今後は、市民に対して、健康づくりや体力づくりもスポーツであるという意識の共有を図っていくとともに、保健福祉分野とも連携しながらスポーツを通じた健康増進、健康寿命<sup>\*1</sup>の延伸なども目指していく必要があります。

\*1 【健康寿命】…健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のこと。平均寿命との差が短いほど、個人の生活の質が高く保たれているとされている

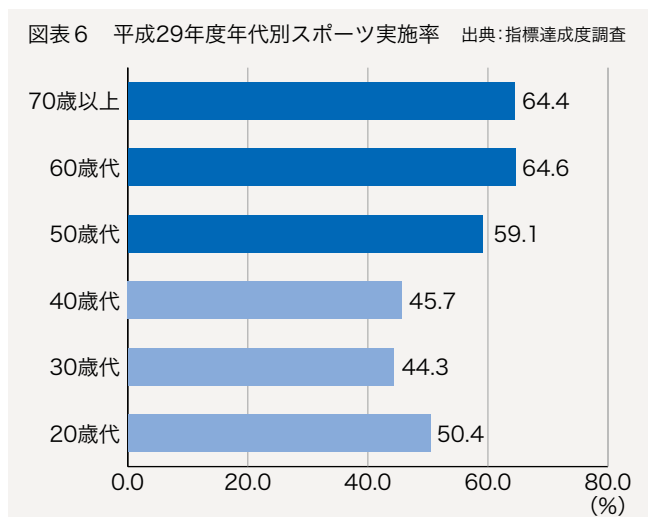
## 種目別スポーツ実施率

- 種目別では、「ウォーキング・散歩」といった軽い運動や、「トレーニング」や「体操（エアロビクス、ラジオ体操等を含む）」、「サイクリング」といった一人でもはじめることができる運動が多い傾向にあります（図表5）。この傾向は今後も続くものと予想され、スポーツ実施率の推移にも影響するものと考えられます。
- 特に積雪期間においては、ウォーキングや散歩などの屋外で行うような軽い運動の機会が制限されてしまうことから、スポーツ実施率向上のためには、これについても対策を検討していく必要があります。



## 年代別スポーツ実施率

- 平成29年度(2017年度)のスポーツ実施率について年代別で見ると、20歳代から40歳代までが全体平均より低く、50歳代以上が高い結果となっています（図表6）。
- 特に60歳代と70歳代は、年代別人口も多く、実施率も目標値である65%に近い結果となっており、スポーツ実施率を牽引する世代といえます。



## スポーツ実施の阻害要因 (ウインタースポーツを除く)

- スポーツを行う上で妨げとなっている理由では、30歳代と40歳代の50%を超える方が「仕事や家事が忙しい」ことを理由に挙げており（図表7）、これらのスポーツから離れている、ビジネスパーソン<sup>※13</sup>（働く世代）や子育てをしている世代に対して、どのように働きかけていくかが、今後、スポーツ実施率を向上させていく上での課題といえます。

※13 【ビジネスパーソン】…20歳代から50歳代にかけての働く世代のこと

図表7 スポーツ(ウィンタースポーツを除く)をする上で妨げになっているもの 出典:平成29年度第2回市民意識調査

全体			20歳代			50歳代		
1	仕事や家事が忙しい	35.1	1	仕事や家事が忙しい	47.9	1	仕事や家事が忙しい	42.8
2	病気・体力・年齢	28.4	2	施設の利用日や時間が限られている	26.0	2	病気・体力・年齢	26.9
3	施設の利用日や時間が限られている	21.3	2	一緒に活動する仲間が少ない	26.0	3	施設の利用日や時間が限られている	25.2
			2	施設利用料が高い	26.0			
男性			30歳代			60歳代		
1	仕事や家事が忙しい	32.2	1	仕事や家事が忙しい	56.2	1	病気・体力・年齢	38.4
2	病気・体力・年齢	29.1	2	育児や介護が忙しい	31.4	2	仕事や家事が忙しい	19.7
3	施設の利用日や時間が限られている	20.4	3	施設の利用日や時間が限られている	25.4	3	施設の利用日や時間が限られている	17.9
女性			40歳代			70歳以上		
1	仕事や家事が忙しい	37.2	1	仕事や家事が忙しい	56.3	1	病気・体力・年齢	51.4
2	病気・体力・年齢	28.1	2	施設の利用日や時間が限られている	23.7	2	施設の利用日や時間が限られている	14.4
3	施設の利用日や時間が限られている	21.9	3	施設利用料が高い	21.8	3	一緒に活動する仲間が少ない	12.3

### 今後行いたいスポーツ (ウィンタースポーツを除く)

- 今後行いたいスポーツでは、「ウォーキング・散歩」が最も高い割合となっており、全体で49.7%となっています。年代別でもすべての年代で最も高い種目となっており、男性より女性の方が高い割合となっています(図表8)。
- この結果からも、スポーツ参画人口を拡大していく上では、ビジネスパーソン<sup>\*13</sup>などが一人でも気軽にスポーツに親しめるような環境が必要です。

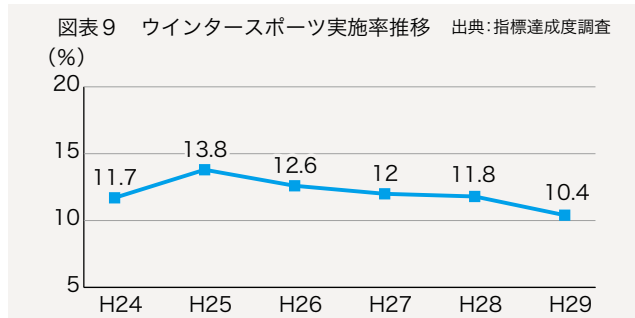
図表8 今後行いたいスポーツ(ウィンタースポーツを除く) 出典:平成29年度第2回市民意識調査

全体			20歳代			50歳代		
1	ウォーキング、散歩	49.7	1	ウォーキング、散歩	31.0	1	ウォーキング、散歩	55.2
2	筋力トレーニング	22.7	2	キャンプ、海水浴	27.5	2	筋力トレーニング	28.2
3	水泳、水中ウォーキング	19.3	3	筋力トレーニング	26.6	3	水泳、水中ウォーキング	20.8
男性			30歳代			60歳代		
1	ウォーキング、散歩	47.8	1	ウォーキング、散歩	43.7	1	ウォーキング、散歩	60.1
2	筋力トレーニング	23.9	2	キャンプ、海水浴	34.7	2	筋力トレーニング	21.6
3	釣り	20.6	3	エアロビクス、ヨガ	30.0	3	パークゴルフ	20.6
女性			40歳代			70歳以上		
1	ウォーキング、散歩	51.2	1	ウォーキング、散歩	42.6	1	ウォーキング、散歩	51.5
2	エアロビクス、ヨガ	25.7	2	筋力トレーニング	26.9	2	パークゴルフ	20.1
3	水泳、水中ウォーキング	22.9	3	キャンプ、海水浴	25.9	3	筋力トレーニング	13.3

\*13 【ビジネスパーソン】…20歳代から50歳代にかけての働く世代のこと

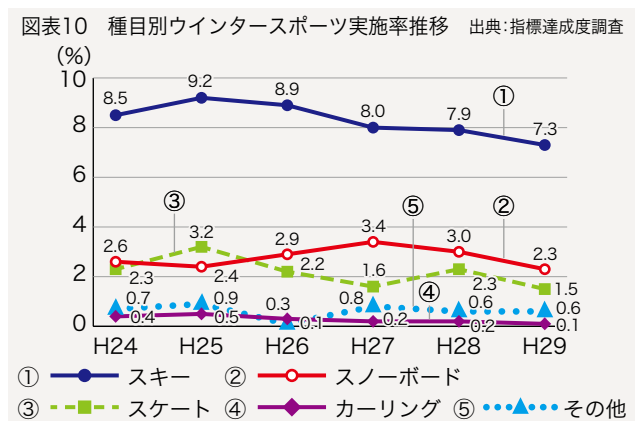
## ②ウインタースポーツ実施率〔平成25年度：13.8%→平成29年度：10.4%〕

- ウインタースポーツ実施率は年に1回以上ウインタースポーツを行った成人の割合を示す指標として、札幌市が独自に調査しているものです。
- 札幌市のスポーツ文化の一つであるウインタースポーツを振興するため、これまでも、市民が楽しくウインタースポーツを実施したり、観戦したりすることができる環境づくりを進めてきました。
- ウインタースポーツ実施率については、その目標値として25%を掲げ、様々な事業を展開していますが、近年はやや減少傾向で推移しており、平成29年度(2017年度)の調査では10.4%に留まっています(図表9)。

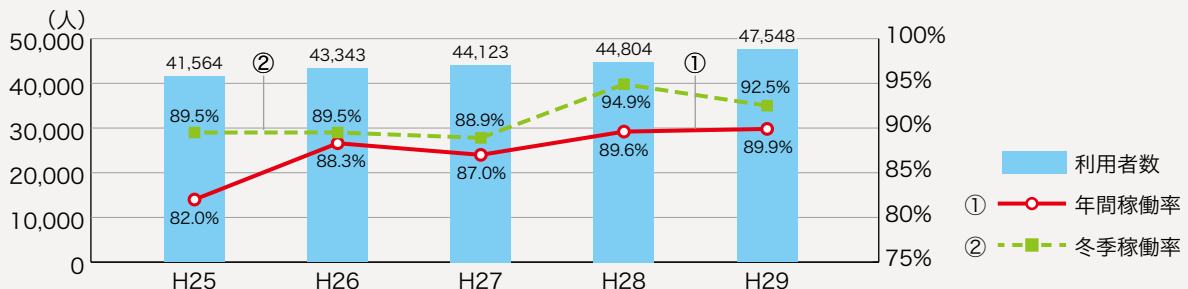


### 種目別ウインタースポーツ実施率

- ウインタースポーツ実施率を種目別で見ると、スキーが7.3%と最も多く、次いでスノーボード2.3%、スケート1.5%の順となっています(図表10)。
- 平成24年度(2012年度)に通年型施設<sup>※14</sup>(どうぎんカーリングスタジアム)を開設したカーリングについては、現状としては、ウインタースポーツ実施率が低いものの、施設の稼働率は高く(図表11)、また、アンケートの結果からも今後行いたいウインタースポーツとして、各年代から押しなべて回答があります(図表12)。また、平成30年(2018年)に開催された平昌オリンピックでの日本代表の活躍もあり、全国的にもカーリング人気が高まっていることから、潜在的なニーズは高いものと考えられます。



図表11 どうぎんカーリングスタジアム利用者数



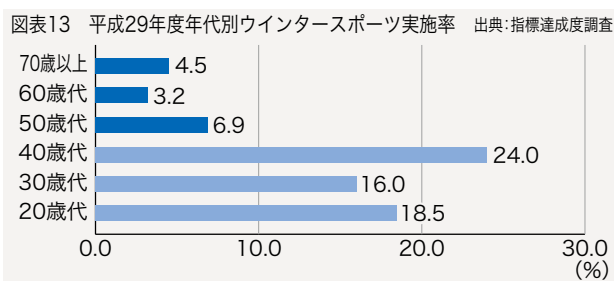
※14 【通年型施設】…1年を通じて利用できる施設

図表12 今後行いたいウインタースポーツ 出典:平成29年度第2回市民意識調査

全体			20歳代			50歳代		
1	スキー	24.7	1	スノーボード	41.5	1	スキー	22.0
2	スケート	12.9	2	スキー	38.0	2	カーリング	13.5
3	スノーボード	11.6	3	スケート	24.9	3	スケート	8.6
4	カーリング	10.1	4	カーリング	8.3	4	スノーボード	6.0
5	その他	5.9	5	その他	1.7	5	その他	5.5
男性			30歳代			60歳代		
1	スキー	30.2	1	スノーボード	39.0	1	スキー	18.0
2	スノーボード	12.5	2	スキー	33.1	2	カーリング	11.6
3	カーリング	11.7	3	スケート	31.9	3	その他	6.7
4	スケート	11.3	4	カーリング	7.4	4	スケート	6.2
5	その他	6.0	5	その他	2.2	5	スノーボード	1.2
女性			40歳代			70歳以上		
1	スキー	30.2	1	スキー	43.1	1	その他	11.0
2	スノーボード	12.5	2	スケート	22.8	2	スキー	8.3
3	カーリング	11.7	3	スノーボード	15.5	3	カーリング	6.7
4	スケート	11.3	4	カーリング	12.6	4	スケート	4.5
5	その他	6.0	5	その他	2.9	5	スノーボード	0.9

### 年代別ウインタースポーツ実施率

- 平成29年度(2017年度)のウインタースポーツ実施率を年代別で見ると、若い世代の実施率が高く、高齢者層ほど低い結果となっています(図表13)。これは、50歳以上が高い結果となっているスポーツ実施率とは大きく異なる傾向といえます。



### ウインタースポーツ実施の阻害要因

- ウインタースポーツを行う上での妨げとなっている理由を全体で見ると、「仕事や家事が忙しい」が最も高い結果(図表14)であり、次いで割合の高い「用具購入にお金がかかる(36.5%)」や「施設利用料が高い(25.4%)」が、他のスポーツと比べウインタースポーツで特に顕著にみられる傾向です。また、施設が郊外にあることが多いことから、交通アクセスの面で他のスポーツより行いにくいケースも考えられます。
- そのため、ウインタースポーツを振興していく上では、地域などの身近な場所で気軽に楽しめるような取組を検討するほか、経済的負担を軽減するための施策を引き続き実施していくことが必要と考えられます。



- 60歳代と70歳代では、ウィンタースポーツを行う上での妨げの理由として「病気・体力・年齢」が最も多い結果となっています(図表14)。妨げの理由は他のスポーツと同様ですが(図表7)、前述の年代別ウィンタースポーツ実施率(図表13)のとおりに、高齢者層ほど実施率が低い結果となっていることから、体力や年齢といった影響はウィンタースポーツの方がより大きいものと考えられます。
- この点に留意した上で、今後もウィンタースポーツを振興していくためには、体力や年齢などの個人差にも配慮した、幅広い年代が参加できるきっかけづくりやウィンタースポーツを中断している世代を再び取り入れていくような取組のほか、気軽に参加できる冬季に行えるスポーツメニューの提示などの取組が必要です。
- また、ウィンタースポーツを札幌市のスポーツ文化として根付かせていくためには、特に札幌市の未来を担う世代が、子どもの頃からウィンタースポーツに親しむ機会を増やし、将来の実施率の向上につなげていくことが重要です。
- 札幌市内におけるスキー学習の実施校は一時期減少していたものの、近年は高い水準を保っていますが(平成29年度では小学校が100%、中学校88.8%)、今後は学校教育に限らず、子どもの頃からウィンタースポーツに親しみ、楽しさを感じる機会を提供することが必要と考えられます。

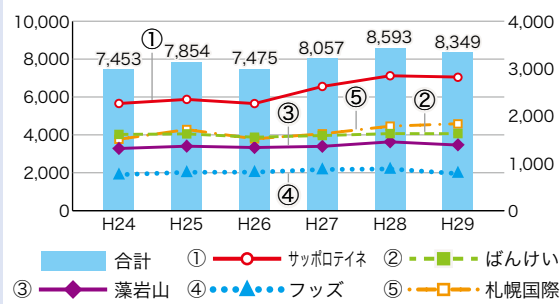
図表14 ウィンタースポーツを行う上での妨げ 出典:平成29年度第2回市民意識調査

全体			20歳代			50歳代		
1	仕事や家事が忙しい	38.0	1	用具購入にお金がかかる	52.1	1	仕事や家事が忙しい	41.6
2	用具購入にお金がかかる	36.5	2	仕事や家事が忙しい	41.8	2	用具購入にお金がかかる	33.7
3	施設利用料が高い	25.4	3	施設利用料が高い	40.0	3	病気・体力・年齢	30.5
男性			30歳代			60歳代		
1	用具購入にお金がかかる	40.0	1	仕事や家事が忙しい	57.7	1	病気・体力・年齢	30.9
2	仕事や家事が忙しい	35.9	2	用具購入にお金がかかる	46.6	2	用具購入にお金がかかる	25.0
3	病気・体力・年齢	26.4	3	育児や介護が忙しい	34.6	3	施設へのアクセスが悪い	18.6
女性			40歳代			70歳以上		
1	仕事や家事が忙しい	39.7	1	仕事や家事が忙しい	52.3	1	病気・体力・年齢	46.8
2	用具購入にお金がかかる	34.1	2	用具購入にお金がかかる	44.5	2	一緒に活動する仲間が少ない	16.9
3	施設利用料が高い	26.2	3	施設利用料が高い	32.8	3	施設の利用日や時間が限られている	14.3

〈参考:市内スキー場の利用状況について〉

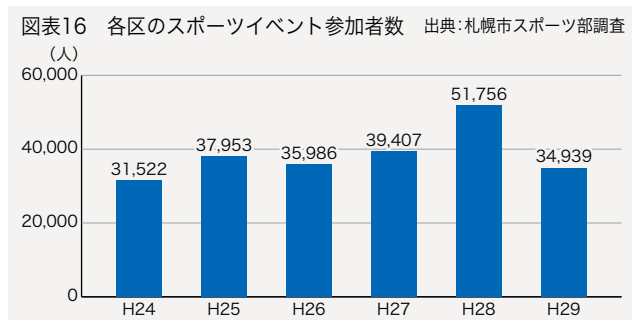
ウィンタースポーツ実施率は近年減少傾向ですが、市民がウィンタースポーツを行う場である市内スキー場の利用状況は、増加傾向となっています(図表15)。これは一時減少していたスキー授業の実施学校数が回復したことや、アジアを中心とする外国人観光客によるスキーを含めた体験型観光へのニーズの高まりによる影響と考えられます。

図表15 市内スキー場のリフト利用状況(利用者延べ人数、単位:千人)  
出典:札幌市「札幌の観光」



### ③各区で実施するスポーツイベントの参加者数(平成25年度：37,953人→平成29年度：34,939人)

- 地域で身近にスポーツを親しむことができる機会は、地域住民の交流の場となり、地域コミュニティの醸成につながります。推進計画では、地域におけるスポーツの機会を示す指標として、各区で実施する地域スポーツイベントの参加者数を用いています。



- 平成28年度(2016年度)には2017冬季アジア札幌大会の開催に伴う関連イベントなどにより、目標値である50,000人を達成し(図表16)、スポーツイベントへの参加を通じて人と人がつながることで、地域でスポーツに親しめる機会を確保することについては一定の成果がみられたと考えています。ただ、平成29年度(2017年度)においては、このような大規模イベントの開催がなかったことも影響してか、平成27年度(2015年度)以前の水準に減少しています。
- スポーツを通じた地域での取組は、住民同士の交流を促進させ、見守り・支えあいや防犯活動などにつながり、地域の安全・安心確保にも有効であることから、今後もスポーツ推進委員<sup>\*15</sup>や体育振興会<sup>\*16</sup>などと連携し、各区や地域単位で実施するスポーツイベントの開催や支援を行っていくことが重要と考えられます。

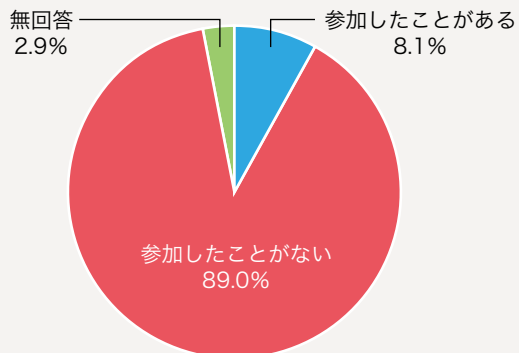
### スポーツボランティア<sup>\*9</sup>への参加

- 地域におけるスポーツの場は、多くのボランティアに支えられており、地域単位のイベントから大規模なスポーツイベントまで、地域のスポーツ活動の活性化を図る上ではボランティアの協力が不可欠です。2017冬季アジア札幌大会では、多くのボランティアが大会の運営を支え、その重要性があらためて認識されたといえます。
- 平成29年度(2017年度)の調査では、市民のうちスポーツボランティア<sup>\*9</sup>に参加したことがある割合は8.1%となっています(図表17)。笹川スポーツ財団の「スポーツ白書2017」によれば、成人のスポーツボランティア<sup>\*9</sup>実施率(過去1年間にスポーツボランティア<sup>\*9</sup>を行った人の割合)は、近年6%から8%台を推移しており(図表19)、札幌市も同じような状況といえます。また、実際に参加したことはなくとも、今後ボランティアに参加したいと思う市民も一定割合(18.8%(図表18))存在しています。このことから、これまでの各種イベントによって浸透し始めたボランティア文化をさらに醸成していくとともに、市民がボランティアに参加しやすい環境を整備していくことも重要です。
- なお、ボランティアへの参加を決める際に重視するものとして、「時間や期間が適度であること(73.8%)」や「身近な場所で参加できること(66.1%)」が高い割合となっています(図表20)。今後、活動を拡大していく上では、このようなニーズへの配慮も必要です。

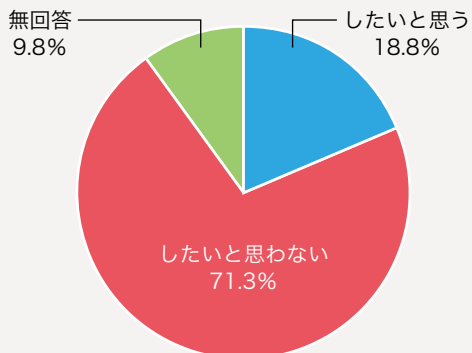
<sup>\*9</sup> 【スポーツボランティア】…スポーツイベントや大会の運営のほかにも、スポーツサークルやクラブチームの運営、指導者や審判、地域のスポーツ活動等のボランティアとして携わることを指す

<sup>\*15</sup> 【スポーツ推進委員】…スポーツ基本法第32条に基づき、市町村教育委員会が委嘱する非常勤の職員(任期2年)。各地域のスポーツ関係団体と連携を図り、全市及び各区スポーツ事業等の企画・運営及び指導を行うなど、地域スポーツの振興に取組んでいる

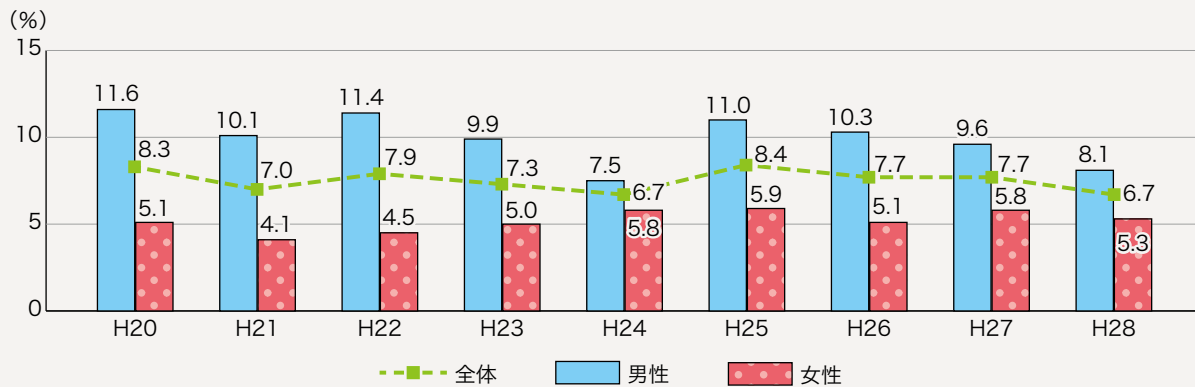
図表17 スポーツボランティア<sup>※9</sup>参加経験  
出典：平成29年度第2回市民意識調査



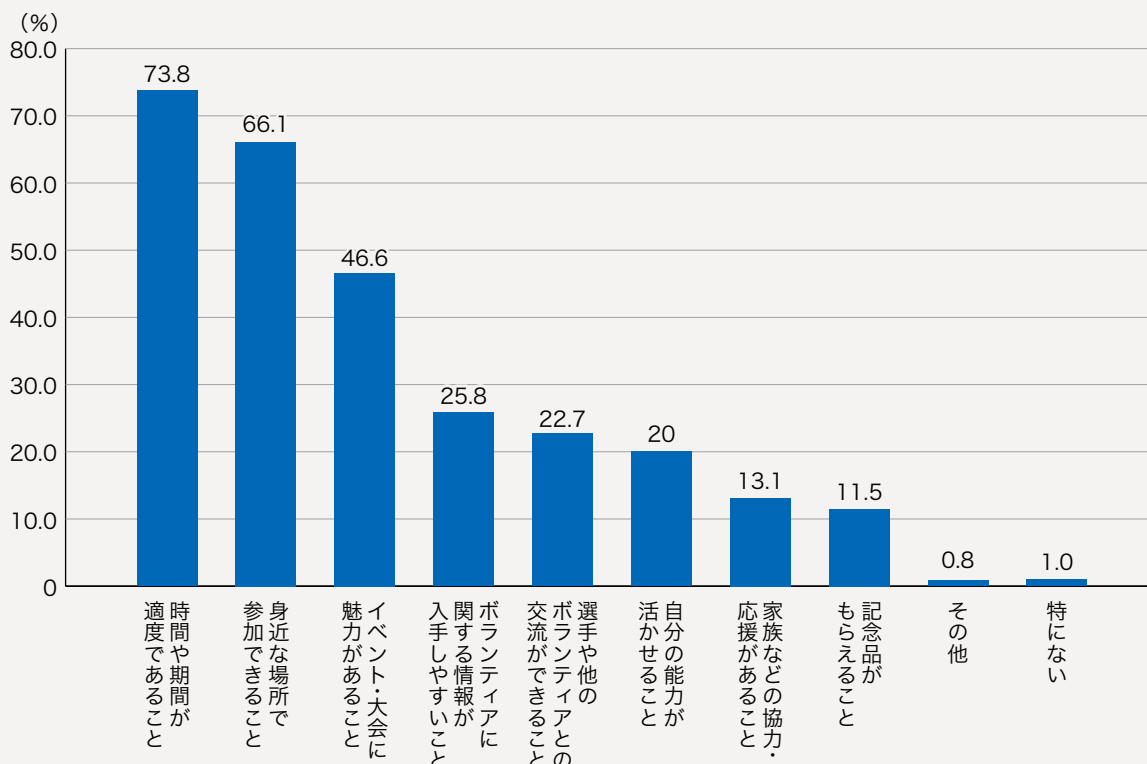
図表18 スポーツボランティア<sup>※9</sup>に参加したい人  
出典：平成29年度第2回市民意識調査



図表19 成人のスポーツボランティア<sup>※9</sup>実施率の推移 出典：笹川スポーツ財団「スポーツ白書2017」



図表20 スポーツボランティア<sup>※9</sup>へ参加する際に重視するもの 出典：平成29年度第2回市民意識調査



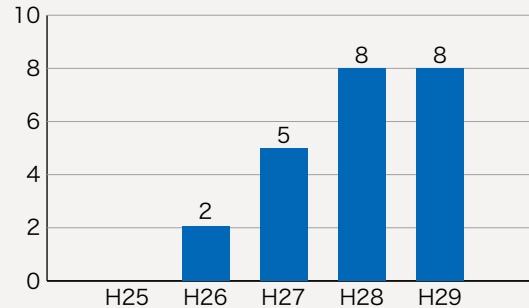
※16 【体育振興会】…地域のスポーツ振興を図ることを目的として、学校を拠点として自主管理運営する、地域住民による組織

## ④ 計画期間中に新たに開催する大規模な全国大会や国際大会の大会数(累計) 〔平成29年度末:累計8大会〕

札幌市は、大規模なスポーツイベントを継続的に開催してきたことで、大会運営のノウハウが蓄積され、世界有数のウィンタースポーツ都市<sup>※17</sup>へと発展してきました。大規模なスポーツイベントの開催は、市民がトップレベルのスポーツにふれる機会を増やし、街に活力を与え、観戦文化の醸成につながるものといえます。

- 札幌市では、平成25年度(2013年度)から平成29年度(2017年度)までの間に選手、役員、観客を合わせて1,000人以上が参加する大規模な大会をすでに8大会開催しました(図表21)。
- 今後、2019年度にはラグビーワールドカップ<sup>TM</sup>、2020年度には東京オリンピック・パラリンピック競技大会と世界が注目するスポーツイベントが続くことから、目標年度である2022年度までに、当初目標数の10大会の達成は確実といえます。
- これからも札幌市が魅力ある都市として国内外からヒト、モノ、情報などを引き付け、ウィンタースポーツ拠点都市としての存在価値を高めていくためには、さっぽろグローバルスポーツコミッションと連携し、引き続きスポーツイベント誘致に取り組んでいくとともに、スポーツイベントの開催を通じて、札幌や北海道の活性化につなげていくことが重要です。

図表21 新たに開催された国際大会等の大会数推移(累計)



※17 【ウィンタースポーツ都市】…ウィンタースポーツの拠点としての環境・ライフスタイルが充実した都市

図表22 札幌で開催された大規模スポーツイベント(冬季オリンピック開催以降)

開催年度	大会名称
昭和46年	第11回オリンピック冬季競技大会札幌大会
	宮様スキー大会国際競技会(昭和5年以降、継続開催)
昭和48年	第29回国民体育大会冬季大会スケート競技会
昭和49年	IIHF世界アイスホッケー選手権大会
昭和54年	FISワールドカップスキージャンプ大会(以降、継続開催)
	FIS札幌国際スキーマラソン大会(以降、継続開催)
昭和60年	第1回アジア冬季競技大会
昭和62年	北海道マラソン(以降、継続開催)
	ツール・ド・北海道(以降、継続開催)
平成元年	第44回国民体育大会
	第2回アジア冬季競技大会
平成2年	第15回冬季ユニバーシアード大会
平成5年	FISワールドカップノルディックコンバインド大会
平成6年	FISワールドカップクロスカントリー大会
平成12年	FISワールドカップスノーボード大会
平成14年	FIFAワールドカップ
平成15年	第22回アジア野球選手権大会
平成17年	FISワールドカップクロスカントリー大会
平成18年	FIBAバスケットボール世界選手権
	世界バレーボール選手権大会
	FISノルディックスキー世界選手権大会
平成20年	IIHF世界アイスホッケー選手権大会
平成21年	第25回アジア野球選手権大会
	第65回国民体育大会冬季大会スキー競技会
平成25年	FIVB女子バレーボールワールドグランプリ
平成26年	FISワールドカップノルディックコンバインド大会
	世界女子カーリング選手権
平成27年	平昌オリンピック アイスホッケー2次予選
	FISワールドカップスノーボード大会
	ISUグランプリNHK杯フィギュアスケート競技会
平成28年	FISワールドカップノルディックコンバインド大会
	第8回アジア冬季競技大会(2017/札幌)
	IPCノルディックスキーワールドカップ



## (2) 3つの目標とこれまでの取組状況

### 目標1 スポーツを通じて市民、誰もが元気に

#### 目標の趣旨

スポーツの裾野を広げるためには、スポーツを行っている人への取組だけではなく、スポーツを行っていない人に対して、スポーツに親しむように促すことが重要です。

この目標では、ライフステージ<sup>※2</sup>や体力、障がいの有無に関わらず市民の誰もが生涯にわたって、スポーツを通じ、健康や生きがいを得る機会をつくること、また、スポーツをするための環境を整備して、その情報をわかりやすく発信することに取り組んできました。

#### 成果指標

##### ①スポーツ実施率

目標値:65% 平成25年度:42.1%→平成29年度:56.4%

##### ②ウインタースポーツ実施率

目標値:25% 平成25年度:13.8%→平成29年度:10.4%

#### これまでの主な取組状況

### 方針1 四季を通して、誰もが気軽にスポーツにふれられる環境をつくります

#### ●施設利用やサービスの情報の充実

スポーツ施設への公衆無線LAN <sup>※18</sup> の整備	平成28年度実施
国際大会等が開催可能な市有スポーツ施設に無料公衆無線LAN <sup>※18</sup> 環境を整備し、市民や観光客に対する利便性及び満足度の向上を図りました。 (整備施設)札幌ドーム、大倉山ジャンプ競技場、宮の森ジャンプ競技場、白旗山競技場、月寒体育館、美香保体育館、どうぎんカーリングスタジアム	

このほか、各種事業やイベントの実施状況に合わせて、利用者視点に配慮したホームページの更新やチラシ・パンフレットの作成に努めたほか、スポーツ施設のホームページにおいては、指定管理者<sup>※19</sup>により多言語化を実施しました。

#### ●ウインタースポーツを楽しむ機会の充実

カーリング普及事業	平成25年度開始		
カーリングを幅広い世代が楽しむことができる生涯スポーツとして普及させるために、どうぎんカーリングスタジアムで子ども向け指導プログラムやふらっと体験会を開催し、気軽にカーリングを楽しめる機会を創出しました。 ・子ども向け指導プログラム・ふらっと体験参加者数			
H26	H27	H28	H29
1,776人	971人	1,529人	2,061人

※2 【ライフステージ】…人間の一生において節目となる出来事(出生、入学、卒業、就職、結婚、出産、子育て、退職など)によって区分される生活環境の段階

※18 【公衆無線LAN】…駅や空港などの公共施設や飲食店などで、ケーブルがなくてもインターネットに接続できる仕組み

※19 【指定管理者】…公の施設の設置目的を効果的に達成するため、法令等に基づき、その施設の管理運営を行うよう、地方公共団体によって指定された、法人その他の団体

さっぽろっ子ウィンタースポーツパワーアップ事業	平成28年度開始				
<p>中学校、高校におけるスキー学習の充実と、小学生に対する歩くスキーの普及啓発を目的に、インストラクターの派遣を行っています。</p> <p>平成29年度からは肢体不自由のある児童生徒へのインストラクター派遣も行っています。</p> <p>・派遣インストラクター数(延べ)</p> <table border="1"> <tr> <td>H28</td> <td>H29</td> </tr> <tr> <td>1,056人</td> <td>1,097人</td> </tr> </table>		H28	H29	1,056人	1,097人
H28	H29				
1,056人	1,097人				

このほか、誰もが気軽にウィンタースポーツや雪遊びを楽しめる機会の創出や、札幌国際スキーマラソン大会、札幌市長杯スノーホッケー大会など、ウィンタースポーツ大会の開催を支援しました。

### ●トップスポーツやアスリートと身近にふれあう機会の創出

プロスポネットSAPPOROの活用	平成25年度開始														
<p>3つのプロスポーツチーム(北海道日本ハムファイターズ、北海道コンサドーレ札幌、レバンガ北海道)と連携し、スポーツを通じたまちづくりを目標に事業を展開しています。</p> <p>平成30年度(2018年度)からはエスポラーダ北海道も加入し、4チームによる連携事業の更なる活用を検討し、スポーツ振興を図っていきます。</p> <p>&lt;主な事業&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・区民応援デーの実施</li> <li>・サッポロキッズデーの実施</li> <li>・3チーム共通カレンダーの作成</li> <li>・北海道胆振東部地震による被災地域の応援を目的とした「SPORTS MAKE SMILES」プロジェクトによる学校訪問</li> <li>・市役所本庁舎におけるパブリックビューイング</li> <li>・「ミニさっぽろ」におけるブース出展</li> <li>・「雪かき汗かきチャレンジ」事業への協力</li> </ul>															
	<p>直接スポーツ観戦率<sup>※20</sup> 出典：指標達成度調査、市民意識調査 (%)</p> <table border="1"> <tr> <th>年度</th> <th>直接スポーツ観戦率 (%)</th> </tr> <tr> <td>H24</td> <td>42.8</td> </tr> <tr> <td>H25</td> <td>46.9</td> </tr> <tr> <td>H26</td> <td>44.2</td> </tr> <tr> <td>H27</td> <td>45.5</td> </tr> <tr> <td>H28</td> <td>47.2</td> </tr> <tr> <td>H29</td> <td>43.6</td> </tr> </table>	年度	直接スポーツ観戦率 (%)	H24	42.8	H25	46.9	H26	44.2	H27	45.5	H28	47.2	H29	43.6
年度	直接スポーツ観戦率 (%)														
H24	42.8														
H25	46.9														
H26	44.2														
H27	45.5														
H28	47.2														
H29	43.6														

このほか、中学校の運動部活動に外部指導者としてアスリートを派遣する取組や、アスリートの人材バンクの役割を担う一般社団法人A-bank北海道との連携により、アスリートが地域スポーツイベントに講師として参加する取組などを行いました。

## 方針2 ライフステージ<sup>※2</sup>や体力に応じてスポーツを楽しみ、健康や生きがいを得る機会をつくります

### ●子どもがスポーツを体験できる機会の充実

ウィンタースポーツ塾	平成29年度開始
<p>小学生を対象に、フィギュアスケートやクロスカントリースキーなどのウィンタースポーツを幅広く体験できる「エントリーコース」と高いレベルの技術指導を受けられる「エキスパートコース」を開設し、ウィンタースポーツの裾野の拡大と競技力の向上を図っています。</p> <p>平成29年度(2017年度)において、定員240名に対して2,576名の応募があったため、体験できる子どもが限られてしまいました。平成30年度(2018年度)からは、体験機会を増やすため、冬季だけでなく通年で体験会を実施しています。</p> <p>【実施種目】</p> <p>スキージャンプ、クロスカントリースキー、フィギュアスケート、カーリング、リュージュ、スノーボード</p>	

※20 【直接スポーツ観戦率】…成人のうち、年に1回以上スポーツを直接観戦した人の割合

## ●障がい者スポーツの活動の場を拡充

地域における障がい者スポーツ普及促進事業	平成27年度開始
平成29年(2017年)9月1日から、市立札幌みなみの杜高等支援学校において、札幌市で初となる障がい者スポーツ専用の学校開放を開始し、競技用の車いすや、ボッチャをはじめとする体験用具を配置しました。 このほか、障がい者スポーツに関するイベントや調査研究の結果を踏まえて作成した、「障がい者スポーツ普及促進プログラム」を元に、障がい者スポーツが地域に定着するための取組を行っています。	

このほか、スポーツ施設の改修時には、手すりや点字タイル、オストメイト対応の設備などの設置を行っており、今後も引き続き実施していきます。

### 現状

これまで、特に子どもに対するスポーツ振興に力を入れてきました。子どもを対象にした事業は、スポーツ実施率、ウインタースポーツ実施率の向上にただちに効果として表れてくるものではありませんが、将来にわたってスポーツ文化を定着させていくためには非常に重要なことです。

成果指標であるスポーツ実施率は平成29年度(2017年度)において56.4%まで上昇しましたが、一方で、ウインタースポーツ実施率については、近年減少傾向で推移しており、平成29年度(2017年度)においては10.4%に留まっています。

### 課題

- 超高齢社会<sup>※12</sup>を迎え、健康寿命<sup>※1</sup>の延伸が大きな命題となる中で、健康づくりや体力づくりを目的としたスポーツ参加がより重要となってくる。
- 冬季は積雪や気温が低い影響もあり、散歩やウォーキングなど、屋外で気軽に行える運動の機会が限られる。
- スポーツ実施率が低い20代から40代をターゲットにしたスポーツ推進策が必要。
- ウインタースポーツは用具などの経済的負担が大きいこと、行う場が限られ、行動に要する時間的負担が大きいことなどから、参加しにくい場合がある。
- ウインタースポーツの振興には、体力や年齢などの個人差にも配慮した、幅広い年代が参加できるきっかけづくりや、気軽に参加できる冬季に行えるスポーツメニューの提示などの取組が必要。
- 子ども世代が少なくなり、ウインタースポーツを文化として次世代へ継承する動きが縮小している。

※1 **【健康寿命】**…健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のこと。平均寿命との差が短いほど、個人の生活の質が高く保たれているとされている

※12 **【超高齢社会】**…総人口に占める65歳以上の人口割合が21%を超える社会のこと。なお、7%以上14%未満を「高齢化社会」14%以上21%未満を「高齢社会」と呼ぶ

## 目標2 スポーツを通じて地域が元気に

### 目標の趣旨

スポーツは人と人がつながるきっかけをつくることができ、またそのつながりを強くすることもできます。人々が居住する地域において、身近な人たちと主体的に協働することにより、世代間の交流が促進され、地域の活性化や安全・安心な環境づくりにつながります。

この目標では、地域の活動拠点などで、主体的にスポーツに取り組むことができる環境をつくるとともに、スポーツを「する」、「みる」、「ささえる」の視点から地域のコミュニティの醸成に取り組んできました。

### 成果指標

各区スポーツイベント参加者数

目標値:50,000人 平成25年度:37,953人→平成29年度:34,939人

### これまでの主な取組状況

#### 方針3 スポーツを通じて人と人とのふれあいの機会をつくります

##### ●家族でスポーツを楽しむ機会づくり

さっぽろっ子ウインタースポーツ料金助成事業		平成28年度開始
家族でウインタースポーツに親しめる機会を増やすため、市内の小学校3年生を対象にスキー場におけるリフト料金や、スケート場における貸靴料の一部を助成しています。		
●補助券の使用者数		
H28	H29	
2,037人	3,844人	

とよひらスポーツ応援プロジェクト事業		平成27年度開始
多数の国際規模のスポーツ施設があり、プロスポーツチームの本拠地ともなっている豊平区の特徴を活用し、月寒屋外競技場やどうぎんカーリングスタジアムなどで各種体験会や、札幌ドームで様々なスポーツが体験できるイベント「スポーツバイキング」を開催し、子どもや家族と一緒にスポーツに親しめる場を提供しています。		

##### ●スポーツに参加する人同士のふれあいの機会づくり

スポーツボランティア <sup>※9</sup> 事業		平成29年度開始
平成29年(2017年)2月に開催された2017冬季アジア札幌大会では、スポーツボランティア <sup>※9</sup> として約4,300人の「スマイル・サポーターズ <sup>※21</sup> 」が参加し大会の運営を支えました。大会終了後には、引き続き、北海道マラソンや札幌マラソンなどのスポーツ大会を活動の場として、スポーツを通じたおもてなしを実践しています。		

※9 【スポーツボランティア】…スポーツイベントや大会の運営のほかにも、スポーツサークルやクラブチームの運営、指導者や審判、地域のスポーツ活動等のボランティアとして携わることを指す

※21 【スマイル・サポーターズ】…冬季アジア札幌大会におけるスポーツボランティアの名称。現在も札幌マラソンや北海道マラソンなどのスポーツイベントにおいてボランティア活動を行っている

## 方針4 地域で身近にスポーツに親しめる機会を増やし、地域コミュニティの醸成につなげます

### ●地域のスポーツ活動の機会を充実

#### スポーツ推進委員<sup>\*15</sup>の活用

スポーツ推進委員<sup>\*15</sup>は市や地域でのスポーツイベントの企画運営や実技指導を行っています。  
 スポーツ推進委員<sup>\*15</sup>のスキル向上のために、新任スポーツ推進委員<sup>\*15</sup>に対する研修会や、研究協議会への参加などに取り組んでいます。

#### 学校開放事業

小中学校の体育施設(体育館、グラウンド、格技室、プール)を、市民のスポーツ活動の場として市民に開放しています。

平成29年度(2017年度)からは、市立札幌みなみの杜高等支援学校で障がい者スポーツ専用の学校開放を開始しています。

- 学校開放利用者数

H25	H26	H27	H28	H29
1,358,183人	1,321,299人	1,353,712人	1,360,470人	1,383,436人

#### 地域の健康づくり推進事業

平成24年度開始

市民の自主的な健康づくりを推進するため、健康づくりを目的とした地域の自主活動グループに健康づくりサポーターと呼ばれる、ウォーキング、体操、栄養のことなど健康づくりに関する助言・指導を行うことが出来る人材を派遣しています。

- 健康づくりサポーターの年間派遣回数

H25	H26	H27	H28	H29
64回	69回	100回	103回	106回

### 現状

地域におけるスポーツ活動の担い手である、スポーツ推進委員<sup>\*15</sup>の活用や、体育振興会<sup>\*16</sup>の活動支援を行うことで、各地域で主体的にスポーツを行う環境をつくり、地域におけるスポーツ活動の活性化に取り組んできました。

平成28年度は2017冬季アジア札幌大会の開催に伴い、区単位での競技観戦や選手などへのおもてなし活動を実施することで、住民同士の交流が図られ、成果指標の目標値も達成しました。しかし、翌年度はそのような大規模スポーツイベントがなかったこともあり、以前の水準に低下しました。

また、2017冬季アジア札幌大会で活躍していただいた「スマイル・サポーターズ<sup>\*21</sup>」は、引き続きスポーツ大会を支えるスポーツボランティア<sup>\*9</sup>として活動しており、札幌マラソンをはじめ、多くの大会で活躍しています。

<sup>\*9</sup> 【スポーツボランティア】…スポーツイベントや大会の運営のほかにも、スポーツサークルやクラブチームの運営、指導者や審判、地域のスポーツ活動等のボランティアとして携わることを指す

<sup>\*15</sup> 【スポーツ推進委員】…スポーツ基本法第32条に基づき、市町村教育委員会が委嘱する非常勤の職員(任期2年)。各地域のスポーツ関係団体と連携を図り、全市及び各区スポーツ事業等の企画・運営及び指導を行うなど、地域スポーツの振興に取組んでいる



## 課題

- 地域におけるスポーツを通じた交流を促進するためには、大規模スポーツイベントの開催だけではなく、地域単位でのスポーツイベントをより一層活性化させる必要がある。
- 地域のスポーツ活動を活性化するために、地域が自主的に健康づくりや体力づくりに関する活動を行う意識付けが必要になる。
- 地域スポーツクラブ<sup>※22</sup>としての役割を担う体育振興会<sup>※16</sup>の有効的な活用方法について、継続して検討していく必要がある。
- 各区や地域へのスポーツ活動の取組支援に加え、世代間交流や地域間交流による活動の促進も必要である。
- 市民がよりボランティアに参加しやすい環境を整備していく必要がある。



※16 【体育振興会】…地域のスポーツ振興を図ることを目的として、学校を拠点として自主管理運営する、地域住民による組織

※21 【スマイル・サポーターズ】…冬季アジア札幌大会におけるスポーツボランティアの名称。現在も札幌マラソンや北海道マラソンなどのスポーツイベントにおいてボランティア活動を行っている

※22 【地域スポーツクラブ】…住民がその興味又は関心に応じて身近にスポーツに親しむことができるよう、住民が主体的に運営するスポーツ団体

## 目標3 スポーツを通じて「さっぽろ」が元気に

### 目標の趣旨

札幌市は、アジアで初めて冬季オリンピックを開催した世界的にも有数の北方都市であり、冬季オリンピックを機に整備されたスポーツ関連施設が多く残っています。

このような魅力的なスポーツ環境をいかして、世界女子カーリング選手権や2017冬季アジア札幌大会などの国際的で大規模なスポーツイベントを開催しました。これらの開催により、札幌市が世界中からの注目を受けるとともに、様々な国と地域から多くの人が訪れました。

この目標では、豊富なスポーツ資源の活用や大規模イベントの開催によって、都市ブランドを更に高め、国内はもとより世界に向けて札幌市の魅力を発信していくことに取り組んできました。

### 成果指標

大規模な全国大会や国際大会の大会数(累計)

目標値:10大会 平成29年度末:8大会

### これまでの主な取組状況

#### 方針5 豊富なスポーツ資源をいかして、交流人口<sup>\*11</sup>の増加につとめます

##### ●国際大会を通じたシティプロモート<sup>\*7</sup>

2017冬季アジア札幌大会の開催	平成28年度開催
平成29年(2017年)、32の国と地域から、2,010人の選手・役員を迎えて開催しました。開催期間中はウィンタースポーツの普及振興を図るとともにインバウンド <sup>*23</sup> 需要を取り込むため、海外メディアに対して市内ツアーやセミナーを開催し、ウィンタースポーツ都市 <sup>*17</sup> 札幌のPRにつとめました。	
<ul style="list-style-type: none"><li>開催日程 平成29年(2017年)2月19日~2月26日</li><li>開催競技 5競技/11種別/64種目 スキー(アルペン、スノーボード、フリースタイル、クロスカントリー、ジャンプ)、スケート(スピードスケート、ショートトラック、フィギュアスケート)、アイスホッケー、カーリング、バイアスロン</li><li>参加国 32か国・地域</li><li>観客数 83,612人</li></ul>	

##### ●冬季オリンピック・パラリンピック招致

冬季オリンピック・パラリンピックの招致活動
冬季オリンピック・パラリンピックの招致に向けて、招致機運の醸成、広報、各種調査、競技大会視察を行っています。また、国や北海道、関係市町村や、札幌招致期成会等の経済団体、そして競技団体などとの連携を図りながら官民一体となって招致に向けた取組を推進しています。

<sup>\*7</sup> 【シティプロモート】…まちの魅力を再発見し、創造することで新しい都市の輝きをつくり出すとともに、市民が誇りをもってその魅力を内外に発信することで、世界の人々と多様な関係をつくり出すための活動

<sup>\*11</sup> 【交流人口】…観光者などの一時的・短期滞在からなる人口。定住人口(その地域に住んでいる人口、居住人口)に対する概念

<sup>\*17</sup> 【ウィンタースポーツ都市】…ウィンタースポーツの拠点としての環境・ライフスタイルが充実した都市

<sup>\*23</sup> 【インバウンド】…外国人観光客が日本に旅行しに来ること

## ●スポーツツーリズム<sup>※8</sup>の推進

さっぽろグローバルスポーツコミッションの設立	平成28年度開始				
<p>平成28年(2016年)3月に設立した、さっぽろグローバルスポーツコミッションでは、平昌オリンピックの事前合宿を誘致し、6カ国12チームの受入支援を行ったほか、ウインタースポーツツーリズム<sup>※8</sup>の推進のため、北京ウインタースポーツ博覧会やツーリズムEXPOなどの見本市においてPR活動を行いました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>海外代表合宿誘致件数</li> </ul> <table border="1"> <tr> <th>H28</th> <th>H29</th> </tr> <tr> <td>4件</td> <td>12件</td> </tr> </table>		H28	H29	4件	12件
H28	H29				
4件	12件				

札幌オリンピックミュージアム活用の推進	平成28年度開始																																
<p>大倉山ジャンプ競技場に併設された、旧ウインタースポーツミュージアムを平成28年度(2016年度)に改修し、オリンピックの機運醸成、オリンピック教育の推進を図るため、札幌オリンピックミュージアムとしてリニューアルオープンしました。</p>																																	
<p>オリンピックミュージアム来場者数推移(千人)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>来場者数(千人)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>H15</td><td>133</td></tr> <tr><td>H16</td><td>131</td></tr> <tr><td>H17</td><td>116</td></tr> <tr><td>H18</td><td>122</td></tr> <tr><td>H19</td><td>109</td></tr> <tr><td>H20</td><td>99</td></tr> <tr><td>H21</td><td>87</td></tr> <tr><td>H22</td><td>64</td></tr> <tr><td>H23</td><td>90</td></tr> <tr><td>H24</td><td>86</td></tr> <tr><td>H25</td><td>100</td></tr> <tr><td>H26</td><td>108</td></tr> <tr><td>H27</td><td>103</td></tr> <tr><td>H28</td><td>82</td></tr> <tr><td>H29</td><td>118</td></tr> </tbody> </table>		年度	来場者数(千人)	H15	133	H16	131	H17	116	H18	122	H19	109	H20	99	H21	87	H22	64	H23	90	H24	86	H25	100	H26	108	H27	103	H28	82	H29	118
年度	来場者数(千人)																																
H15	133																																
H16	131																																
H17	116																																
H18	122																																
H19	109																																
H20	99																																
H21	87																																
H22	64																																
H23	90																																
H24	86																																
H25	100																																
H26	108																																
H27	103																																
H28	82																																
H29	118																																

## 方針6 札幌の資源をいかしたスポーツ文化を醸成し、産業を活性化させます

### ●札幌の資源をいかしたスポーツの楽しみ方の提供

まちの魅力を再発見するウォーキングイベント等の実施
<p>各区役所や保健センターが主催するウォーキングイベントを数多く実施したほか、まちの魅力を再発見できるウォーキングマップを作成し、誰もが気軽に取り組めるウォーキングを推進しました。</p> <p>「Sapporoぐるりウォーキングマップ」の作成(平成26年度(2014年度))</p> <p>「名所巡りマップ」の作成(平成26年度(2014年度))</p>

### ●スポーツをいかした産業への取組支援

スポーツを活用した札幌産業活性化事業	平成24年度～平成26年度						
<p>札幌ならではのスポーツ資源を活用したビジネスモデルを、企業・団体・NPO等から公募し、優秀ビジネスモデルの提案事業者へ補助金を交付し、事業化の支援を行いました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>補助金交付件数</li> </ul> <table border="1"> <tr> <th>H24</th> <th>H25</th> <th>H26</th> </tr> <tr> <td>3件</td> <td>3件</td> <td>2件</td> </tr> </table>		H24	H25	H26	3件	3件	2件
H24	H25	H26					
3件	3件	2件					

※8 【スポーツツーリズム】…スポーツを「観る」「する」ための旅行そのものや周辺地域観光に加え、スポーツを「支える」人々との交流、あるいは生涯スポーツの観点からビジネスなどの多目的での旅行者に対し、旅行先の地域でも主体的にスポーツに親しむことのできる環境の整備、そしてMICE推進の要となる国際競技大会の招致・開催、合宿の招致も包含した、複合的でこれまでにない「豊かな旅行スタイルの創造」を目指すものである

## 現状

平成29年度(2017年度)までに、2017冬季アジア札幌大会をはじめとする多くの国際大会を開催しており、成果指標である、計画期間中の大規模な全国大会や国際大会の大会数について、計画終了年度である2022年度までには、目標である10大会に達する見込みです。

今後札幌市で開催される国際大会には、ラグビーワールドカップ2019™や東京2020オリンピックのサッカー競技があり、会場に札幌ドームが活用されるなど、様々な国と地域から多くの人を訪れることが期待されています。

また、現在札幌市では、冬季オリンピック・パラリンピック開催に向け招致活動を進めており、世界に誇るウインタースポーツ都市※<sup>17</sup>を目指しています。

## 課題

○大会の開催だけでなく、大会を通じて地域・経済活性化へとつながるような取組を実施していく必要がある。

○スポーツと札幌市の観光資源※<sup>24</sup>(食や観光など様々な産業分野)を結びつけ、まちの魅力を向上させる取組も重要である。



※17 【ウインタースポーツ都市】…ウインタースポーツの拠点としての環境・ライフスタイルが充実した都市

※24 【観光資源】…観光やレジャーといった余暇を楽しむ需要に応じられる要素のこと



## 2 第2期スポーツ基本計画から取り入れる視点

### (1) 第2期スポーツ基本計画

国が平成29年(2017年)3月に公表した「第2期スポーツ基本計画」は、平成29年度(2017年度)から2021年度までを計画期間とし、スポーツ参画人口を拡大し、他分野との連携・協力により「一億総スポーツ社会」の実現に取り組むことを基本方針としています。

札幌市では、引き続き市民がスポーツに親しめる環境を整えていくため、札幌市の現状も加味しながら、この第2期スポーツ基本計画に盛り込まれた視点を踏まえて、計画の見直しを行います。

第2期スポーツ基本計画のポイント (出典：スポーツ庁 HP <http://www.mext.go.jp/sports/>)





## (2) 第2期スポーツ基本計画におけるキーワード

札幌市では第2期スポーツ基本計画を参酌しスポーツ推進計画を見直していく上で、次の3点をキーワードとして捉え、今後の方向性を検討します。

### ①スポーツ参画人口の拡大(ビジネスパーソン<sup>※13</sup>や子育て世代などへの働きかけ)

これまでも札幌市では、就職や結婚、出産・子育てといった人生の節目でスポーツから遠ざかってしまった人や、スポーツに親しむ機会が少ない人を対象としたスポーツ活動の促進を行ってきましたが、それらの多くは、主に休日や余暇を利用して行う活動でした。

今回の推進計画の見直しでは、日々の生活において行うことができる運動習慣にも着目し、「スポーツ」という言葉の定義をより明確にしました。スポーツは「競技スポーツ」だけを指し示すのではなく、身体活動を伴う釣りやキャンプなどのレジャー・レクリエーションのほか、健康づくりを意識した散歩やラジオ体操などの軽い運動も含むことから、ビジネスパーソン<sup>※13</sup>が日常生活の中で行うことができる徒歩通勤や階段の昇降など、気軽に始められる取組も推進していきます。

また、結婚、出産・子育てを機に、スポーツを行う機会が少なくなる女性に対しても、自宅や子育ての合間でも気軽に取り組める環境の整備についても検討していきます。

### ②スポーツを通じた共生社会<sup>※3</sup>の実現

スポーツは誰もが参加できるものであり、全ての人々が関心や適性等に応じて日常的、自発的にスポーツに参加する機会を確保することが重要です。これは、スポーツに限られた一握りの人々のためにあるのではなく、すべての市民がスポーツを行うことができる、スポーツを見に行くことができる、ボランティア活動やスポーツ経験等をいかした技術指導などを通じて、スポーツを支えることができる環境のことといえます。

札幌市においては、年齢や性別、体力や障がいの有無などを問わず、すべての市民がスポーツを通じて社会へ参加することで、共生社会<sup>※3</sup>が実現されることを目指します。今後に向けては、誰もがスポーツを楽しむことができる環境をつくるとともに、障がい者スポーツの普及促進にこれまで以上に一層取り組んでいきます。また、これから大規模イベントが相次いで開催されることも見据えて、障がいのある方にとっても、スポーツ観戦しやすい環境をつくっていくことも併せて考えていく必要があります。

そして、障がい者スポーツに限らず、すべてのスポーツにおいて、現場で活躍することができる指導者の育成を目指し、市民がいつでも、どこでもスポーツを行うことができる社会の実現を目指します。

※3 【共生社会】…誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である

※13 【ビジネスパーソン】…20歳代から50歳代にかけての働く世代のこと

### ③スポーツを通じた経済・地域の活性化

スポーツはたとえ個人競技であっても、すべての場面において一人で行うことができるとは限りません。個人種目においては、同じスポーツを行うことでお互いに刺激しあひ高めあう仲間の存在があり、そして、一人では行うことができないスポーツにおいては、共に活動する仲間が必要となります。

スポーツは、その特性から極めて相互の協力関係が重要な活動であり、その結果、どのようなコミュニティにおいても強力に人と人とをつなぐ要素を持っています。この特性をいかすことで、人々を元気づけることや、社会に活力をもたらすことができます。

今後は、このようなスポーツの力を、地域の魅力づくりやまちづくりにおいても、最大限に発揮できるような仕組みについても検討が必要となります。

こうしたことから、札幌市の持つスポーツ資源をいかして、観光客誘致やプロモーション活動を展開することで、スポーツツーリズム<sup>※8</sup>を推進し、経済や地域の活性化と交流人口<sup>※11</sup>拡大を目指した取組を実施します。



※8 【スポーツツーリズム】…スポーツを「観る」「する」ための旅行そのものや周辺地域観光に加え、スポーツを「支える」人々との交流、あるいは生涯スポーツの観点からビジネスなどの多目的での旅行者に対し、旅行先の地域でも主体的にスポーツに親しむことのできる環境の整備、そしてMICE推進の要となる国際競技大会の招致・開催、合宿の招致も包含した、複合的でこれまでにない「豊かな旅行スタイルの創造」を目指すものである

※11 【交流人口】…観光客などの一時的・短期滞在からなる人口。定住人口(その地域に住んでいる人口、居住人口)に対する概念

## 3 札幌市の特色をいかして強化する視点

### (1) ウィンタースポーツの振興

雪国である札幌市にとって、厳しい冬の生活環境の中でも、雪を楽しむウィンタースポーツはまさににぎわいを与える大切な文化の一つといえます。

しかし一方では、市民のウィンタースポーツ実施率は伸び悩んでいる状況となっています。

ウィンタースポーツを文化として、これからも根付かせていくためには、市民がウィンタースポーツに親しめる環境や仕組みを整え、実際に体験する機会を創出していくことが重要です。

また、ウィンタースポーツの持つ様々な魅力を身近で感じることができる国際大会などのイベントを開催することは、市民が自ら「する」だけでは感じることはできない、トップスポーツ選手への憧れや高揚感が生まれ、よりウィンタースポーツに対する興味、関心を高める貴重な機会となります。

札幌市では、子どもを対象として、スキーやスケート、スノーボードなどのウィンタースポーツの体験事業を実施しており、このほかにも、スキー学習における指導者派遣やカーリングの普及事業など様々な取組を行ってきました。

今後もウィンタースポーツの振興を重点的な施策と位置づけ、子どもの頃からウィンタースポーツに親しめる機会を増やしていきます。また、札幌市ならではのライフスタイル<sup>※25</sup>としてウィンタースポーツの魅力を体感し、その魅力を発信する人々を増やすことで、「さっぽろ」の都市ブランドを高め、シビックプライド<sup>※26</sup>の醸成を目指します。

### (2) 冬季オリンピック・パラリンピックの招致

札幌市では、昭和47年(1972年)に開催された冬季オリンピックをきっかけに作られた施設が、現在に至るまで、レガシー<sup>※6</sup>として有効的に活用されています。

近年では、平成27年(2015年)に開催された世界女子カーリング選手権や、平成29年(2017年)に開催された2017冬季アジア札幌大会など、様々な国際大会を誘致することにより、国際的なウィンタースポーツ都市<sup>※17</sup>として認知されてきています。

これらの競技大会を開催するには、市民のスポーツへの理解と協力、そして、企業による支援や協力体制が必要不可欠であり、その大きな力は大会を支えるとともに、スポーツを通じた地域の活性化、経済の発展、まちの魅力向上へとつながっていきます。

札幌市が冬季オリンピック・パラリンピックの開催を目指す上では、先のオリンピックで作られた施設を引き続きレガシー<sup>※6</sup>として有効的に活用しながら、老朽化してきている施設を更新し、オリンピック・パラリンピック後には、市民がスポーツに親しむことができる持続可能な施設環境を整えていく必要があります。

また、オリンピック・パラリンピックの招致機運の醸成に向けた取組を進めていくとともに、大会を支える市民の力、とりわけボランティアとして活動する人たちを増やし、養成していくことで、大会を成功へ導くだけでなく、札幌を訪れる観光客などへのおもてなしの精神を育むことができ、

※6 【レガシー】…オリンピック・パラリンピック開催を契機として社会に生み出される持続的な効果

※17 【ウィンタースポーツ都市】…ウィンタースポーツの拠点としての環境・ライフスタイルが充実した都市

※25 【ライフスタイル】…生活様式、営み方。また、人生観・価値観・習慣などを含めた個人の生き方



観光の振興、スポーツによる国際交流の場として「世界に誇るウインタースポーツ都市<sup>\*17</sup>『さっぽろ』」の魅力を発信することにもつながります。

今後に向けては、2度目のオリンピック、そして初のパラリンピックの開催を契機に、市民生活を含め、「さっぽろ」がどのように生まれ変わっていくのか、そして、スポーツ振興や世界平和への貢献といったオリンピック・パラリンピック本来の開催意義について周知していくことで、大会の招致に向けて、多くの市民の共感が得られるように努めていきます。

また、招致活動を進めるに当たっては、国、関係自治体、経済団体や競技団体などに加えて、国際オリンピック委員会(IOC)や日本オリンピック委員会(JOC)との連携についても強化しながら、将来に過度の財政負担を残さず、環境に配慮した、持続可能な大会の実現に向けて取組を進めていきます。

さらには、冬季オリンピック・パラリンピックの招致を通じて、札幌のウインタースポーツ都市<sup>\*17</sup>としての存在感を高め、アジア、そして世界に誇るウインタースポーツの拠点都市を目指して取り組んでいくとともに、大会を契機に、国や地域、文化、言葉、そして障がいの有無などの違いを超えて、誰もがこの札幌・北海道で集い、互いを尊重し合える共生社会を実現し、真の国際都市として、世界に名を馳せられるよう、取り組んでいきます。



<sup>\*26</sup> 【シビックプライド】…市民が、都市を構成する一員であることを自覚し、誇りや愛着をもって、都市をより良くしようとする当事者意識

## 4 課題のまとめと今後の方向性

### (1) これまでの取組に対する課題のまとめ

推進計画では、それまでの札幌市スポーツ振興計画における「する」「みる」「ささえる」という3つの視点を踏襲しながらも、国のスポーツ基本計画や札幌市まちづくり戦略ビジョンで示されたスポーツがもたらす新たな効果に着目し、従来の「個人」を対象とした施策だけではなく、より大きなコミュニティを対象として「地域へのアプローチ」と「さっぽろ全体へのアプローチ」を行うことによりスポーツの推進を目指してきました。

しかし、個人におけるスポーツ実施率の推移は未だ目標の65%には達しておらず、特に20歳代から40歳代にかけての若い世代のスポーツ実施率は低迷しています。また、これからも市民の中にウインタースポーツ文化を根付かせていくためには、引き続き、子どもの頃からウインタースポーツに親しむ機会を増やしていく必要があります。

地域におけるコミュニティの醸成は、スポーツを実施する機会やボランティアなどの形でスポーツに関わる機会を創出することによって、一定の成果は見られたものの、高齢者や障がいのある方が安心してスポーツを行うことができる環境については、現状では改善の余地が見られます。

そして、さっぽろの活性化に関しては、国際大会等の開催や「さっぽろグローバルスポーツコミッション」の設立によって、スポーツツーリズム<sup>※8</sup>の大きな流れはできつつありますが、スポーツの力によって産業を活性化していくためには、より一層、地元企業との連携や、トップスポーツチームとの協働などについて、取り組んでいく必要があります。

今後に向けては、これまでの取組から見えてきた課題や第2期スポーツ基本計画による新たな視点を取り入れて、引き続き「市民」に着目してスポーツ参画人口の拡大を図るとともに、スポーツの力による共生社会<sup>※3</sup>の実現や経済・地域の活性化を目指し、より活力ある「さっぽろ」に向けて取り組んでいきます。そして、未来の冬季オリンピック・パラリンピックの招致も見据え、「世界」が憧れるまちを目指します。

### (2) 今後の方向性

#### 方向性1 「市民」へのアプローチ

個人がスポーツを楽しむことは、スポーツ基本法に権利としてうたわれています。人とスポーツの関わり方は多種多様であり、行政は、ライフステージ<sup>※2</sup>や性別、体力や障がいの有無、活動の目的などの違いに応じて、ソフト面、ハード面において必要な措置を講じるよう努めていく必要があります。

スポーツへの関わり方には、「する」だけではなく、「みる」「ささえる」ことも含まれます。市民がそれぞれのライフステージ<sup>※2</sup>や活動の目的に沿った形で積極的にスポーツに参加することで、健康や体力の保持増進のほか、精神的な充足感を獲得することができます。さらに、スポーツには、人と人の絆を培い、地域コミュニティを醸成し、地域の活性化をもたらす効果もあります。このような

※2 【ライフステージ】…人間の一生において節目となる出来事(出生、入学、卒業、就職、結婚、出産、子育て、退職など)によって区分される生活環境の段階

※3 【共生社会】…誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である

※8 【スポーツツーリズム】…スポーツを「観る」「する」ための旅行そのものや周辺地域観光に加え、スポーツを「支える」人々との交流、あるいは生涯スポーツの観点からビジネスなどの多目的での旅行者に対し、旅行先の地域でも主体的にスポーツに親しむことのできる環境の整備、そしてMICE推進の要となる国際競技大会の招致・開催、合宿の招致も包含した、複合的でこれまでにない「豊かな旅行スタイルの創造」を目指すものである



スポーツの力を「市民」も「地域」も享受できるように取り組んでいくことが重要です。

また、超高齢社会<sup>\*12</sup>の到来により、今後はスポーツを通じて健康寿命<sup>\*1</sup>を延ばし平均寿命との差をできるだけ短くしていくことも重要になってきます。

幼少期におけるスポーツ体験の機会を確保して、実際に活動することは、子どもの体力向上を目指すだけでなく、その後の運動習慣の確保と体力の向上につながる取組であり、将来的なスポーツ実施率に大きな影響を与えることとなります。

日常的に体を動かすことが少ないビジネスパーソン<sup>\*13</sup>については、休日や余暇に行うことができるスポーツの習慣化を目指すことも重要ですが、仕事や家事が忙しいことがスポーツをする上で最も大きな妨げの要因となっていることから、通勤時間や休憩時間などを利用した日常の中で行える運動を取り入れることも大切な要素です。また、女性を中心とした子育て世代においては、女性のニーズや意欲に合ったスポーツ機会を提供していくことも必要です。

高齢の方や障がいのある方に対しても、心身や障がいの状況等に合わせ、健康づくり等の観点も取り入れながら、スポーツを通じた楽しさや生きがいを得られるように、機会を提供していくことが必要です。

このように、あらゆる市民が年齢や体力、経験、目的の違いに応じて主体的にスポーツ活動に関わり、心身の健康や、生きがいを得ることを目指します。

## 方向性2 「さっぽろ」全体へのアプローチ

第2期スポーツ基本計画においては、スポーツで社会の課題解決に貢献し、前向きで活力に満ちた日本を創るとしています。

スポーツは障がいの有無や年齢、国籍等を問わず、誰もが参加できるものです。スポーツを通じて人々がつながり、スポーツの価値を共有することで、他者への理解を促し、共感し、敬意が生まれます。こうしたスポーツの力を通じて、多様な人々とともに生きる共生社会<sup>\*3</sup>の実現を目指します。

そのため、スポーツ活動において必要となる場を提供するとともに、スポーツ施設のバリアフリー<sup>\*5</sup>化など、誰もが安心してスポーツに取り組むことができる環境づくりを推進していくことが重要になります。

また、スポーツは多くの人々を惹きつける魅力的なコンテンツであり、札幌の恵まれたスポーツ資源を最大限活用することで、地域の魅力づくりやまちづくりの核とすることができます。スポーツの力で経済や地域の活性化と交流人口<sup>\*11</sup>の拡大に貢献し、活力みなぎる「さっぽろ」を目指します。

## 方向性3 「世界」へのアプローチ

札幌市のスポーツ環境は、昭和47年(1972年)の冬季オリンピックの開催以降、様々な大規模スポーツ大会の誘致を行い、オリンピックの開催を機に整備されてきた恵まれたハード環境と、これまでに蓄積されたソフト的な環境をいかながら開催されてきたことで形成されてきたものといえます。また、オリンピックを間近に観戦することで、市民にはウィンタースポーツに親しむ文化が理解されており、それは「さっぽろ」の魅力ある文化の一つとして育まれてきました。

アジアでは、2018年平昌大会や2022年北京大会の開催を通じて、ウィンタースポーツが大き

\*1 【健康寿命】…健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のこと。平均寿命との差が短いほど、個人の生活の質が高く保たれているとされている

\*5 【バリアフリー】…高齢者や障がいのある方などが、社会生活をしていく上で障壁となるものを除去すること。道路、建物、交通手段など物理的なものだけでなく、社会的、制度的、心理的なものを含めた全ての障がい無くすこと

\*11 【交流人口】…観光者などの一時的・短期滞在からなる人口。定住人口(その地域に住んでいる人口、居住人口)に対する概念

\*12 【超高齢社会】…総人口に占める65歳以上の人口割合が21%を超える社会のこと。なお、7%以上14%未満を「高齢化社会」14%以上21%未満を「高齢社会」と呼ぶ

\*13 【ビジネスパーソン】…20歳代から50歳代にかけての働く世代のこと

く発展していくことが予想されます。これは冬季オリンピック・パラリンピック競技大会の招致を目指す札幌市においても、アジアにおけるウインタースポーツ都市<sup>\*17</sup>としての地位を確立していくための絶好の機会といえることができます。

加えて、今後は、ラグビーワールドカップ2019<sup>TM</sup>や東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会という大規模なスポーツイベントが札幌市でも開催される予定となっており、世界中から注目を受ける機会が続きます。

札幌市の持つ魅力やスポーツ環境を世界に向けて発信することで、国内外から人、モノ、情報などを引き付け、世界都市として北海道をリードしていくまちを目指します。



<sup>\*17</sup> 【ウインタースポーツ都市】…ウインタースポーツの拠点としての環境・ライフスタイルが充実した都市